

10月 4日(日)	「アブラハムの子は、イサク、イシュマエル。彼らの系図は次のとおりである」(28－29節)。歴代誌は南ユダ王国(ダビデ王朝)の興隆と亡国を描くが、その冒頭でアダムからヤコブまでの系図に連なるすべての名を丁寧に紹介する。今、南ユダに敵対している周辺国の人びとも、神の深い慈しみの中に名を覚えられてきたことを記さずにおれなかったのだろう。
歴代上 1章	
5日 (月)	「このアカル(災いをもたらす者)は、滅ぼし尽くしてささげるべきことに対して不誠実で、イスラエルに災いをもたらした」(7節)。ユダ族の系図において、ただ一人アカルの罪(ヨシュア記7章)だけが詳述されている。神への献げものを誤魔化して自分の懐に入れる罪は最大の誘惑だからだろう。「神のものは神に!」。今日この主イエスの言葉を心に留めて。
歴代上 2章	
6日 (火)	「捕虜となったエコンヤの子は、息子シュアルティエルをはじめ、マルキラム、ペダヤ…」(17－18節)。歴代誌の系図の特徴は「バビロン捕囚以降」のエコンヤの子孫の名を詳しく残していること。約束の地を失い、辛苦の時代を歩んだ一人ひとりを決して忘れないために。栄光の王国時代だけでなく、苦難の時代を生き抜いた一人ひとりにより信仰は継承される。
歴代上 3章	
7日 (水)	「ヤベツがイスラエルの神に『どうかわたしを祝福して、わたしの領土を広げ…』と祈ると、神はこの求めを聞き入れられた」(10節)。母の産みの苦しみを背負って生きた男ヤベツは神に向かって大胆にも「私の地境を広げてください」(新改訳)と祝福を求め祈った。神の祝福を「こんなものだろう」と制限するのではなく、大胆に求めて歩む信仰をいただきたい。
歴代上 4章	

8日 (木) 歴代上 5章	「彼らは戦いに際して神に助けを求め、その信頼のゆえに祈りは聞き入れられて敵に打ち勝つ力を得…」(20節)。十二部族のうちダビデ家を生んだユダ族の系図に続いて、歴代誌はなぜかヨルダン川東岸のルベン、ガド、マナセの系図を記している。列王記では軽視されている三部族だが、歴代誌は周辺に住む彼らの信仰を通して「何か」を伝えようとしている。
9日 (金) 歴代上 6章	「神の箱が安置されたとき以来、ダビデによって主の神殿で詠唱の任務に就けられた者は次のとおりである」(16節)。「大祭司」の紹介に続き、歴代誌は「詠唱者」を紹介していく。主なる神の礼拝において賛美がどれだけ重視されたか。カナンの神々の礼拝が賑やかで騒々しい礼拝であったのに対して、心を尽くして賛美をささげる礼拝が求められたのである。
10日 (土) 歴代上 7章	「エフライムの娘はシェエラ、彼女は上ベト・ホロン、下ベト・ホロン、ウゼン・シェエラを築いた」(24節)。歴代誌は十二部族の系図を紹介する中で、なぜかエフライムの娘シェエラの功績を書き記している。町の建設者として女性の名が記されるのは珍しいこと。男たちの名がひたすら並べられている系図に、この「シェエラの一文」が不思議な光を放っている。
11日 (日) 歴代上 8章	「彼らは皆ベニヤミンの子孫である」(40節)。歴代誌のはじめの9章に渡る系図で、ベニヤミン部族は7, 9章にも書かれ、本章はまるごとベニヤミン。内容が一部違うが、どの名前もおろそかにしたくなかったのか。「主に背いた罪(10:13)」に定めながらも、最初の王サウルの家系を大切に残した著者たちは、これが使徒パウロに至るとはよもや知らなかっただろう。